

エミール・ゾラ『愛の一ページ』考察

——病巣としてのパリ

林 明日佳

序論

『愛の一ページ *Une page d'amour*, 1878』は、エミール・ゾラが著した全二十巻の大作『ルーゴン＝マッカーール叢書』の第八巻にあたる小説である。露骨あるいは露悪的とも言われる描写によってスキャンダルを巻き起こしベストセラーとなった二作『居酒屋 (*L'Assomoir*, 1876)』と『ナナ (*Nana*, 1879)』に挟まれていることもあり、フランス国内外での知名度は低く、研究対象とされることもそれほど多くない。

ゾラ自身はこの作品について、「少々プチブル的で、ありふれているけれど、心地よく読まれるだろうと思う⁽¹⁾」、「『居酒屋』と『ナナ』の間に書かれた『愛の一ページ』は、私の構想では、逆のもの、優しさであり甘美さとなるべきものだった。長い間私は、誠実な女性の気質の中に起こる突然の情熱、不意に生まれ不意に去っていき、あとに何も残すことのない愛を研究したいという欲求を持っていた⁽²⁾」などと説明している。しかし、穏やかで甘美な作品として作者から位置付けられたこの作品は、全体を通して常に病のイメージにつき纏われて不穏な影を帯びている。小説の冒頭から引きつけを起こして死にかけているヒロインの病弱な娘ジャンヌ、芝居がかった不調の訴えで慈悲と施しを乞うフェチュ婆さん、重篤な発作に襲われたジャンヌにヒルを用いた治療を敢行するドゥベルル医師など、病を帯び病に干渉する登場人物は多いが、各部末で長大な情景描写を捧げられ、もう一人の主人公とでも言うべき存在感を放つパリ、ジャンヌの目を借りて「見えない汚泥によって呼吸困難を起こさせる、悪臭のする井戸 *ces puits empestés, exhalant l'asphyxie de leur boue invisible*」に喩えられる大都市パリもその例外ではない。

本論文では、風俗が墮落した第二帝政期パリを「病巣」と捉えるゾラの観点を指摘、『愛の一ページ』で描かれるヒロイン・エレヌの不貞を、パリからの刺激を受けて発症した「病への罹患」と読み解くことを目指していく。

病巢の観念

ゾラは『実験小説論 *Le Roman Expérimental*, 1879』において、クロード・ベルナルが『実験医学序説 *Introduction à la Médecine Expérimentale*, 1865』で生命の環 (le circulus vital) について述べた以下の記述に全面的な同意を示している。

このようにして筋肉と神経の器官は、血液を作り出す器官の活動を維持している。しかし血液は、血液を生み出す器官を養ってもいる。そこには器質的ないし社会的連帯があり、重要な生命要素の活動の不調または停止によって、動物器官の働きが均衡を崩すか、混乱や停止を生じさせるまで、ある種の永続的な運動を保っている。実験医学者の問題はしたがって、器官の不調の単純な決定要因 (テルミニスム) を発見すること、つまり、最初の現象をつかむことにある、これが後に続くすべての現象を、複雑な、しかし最初の決定要因がそうだったように不可欠の決定要因によって引き起こすのである。(中略) 我々は、後に示される例によって、器官 (の連携) の分断や、見た目にはこれ以上ないほど複雑な不調が、どのようにして最初の単純な決定要因に帰着させられるか、この最初の決定要因が、どのようにしてのちのちより複雑な決定要因を引き起こすかを見ていくことになるだろう⁽³⁾。

ゾラはベルナルの考えは人体のみならず社会にもそのまま適用できるとした上で、「異なる四肢、異なる器官どうしを結びつける連帯が存在し、その結果、ある一つの器官が腐敗すると、他の多数の器官も損なわれ、非常に複雑な病が発生する⁽⁴⁾」という病態観をまとめている。

こうした病態の捉え方は、『医学学説および疫病分野論体系の吟味 *Examen des doctrines médicales et de nosologie*, 1821』にまとめられたフランソワ・ブルセの「生理学的医学」の理論に端を発したものである⁽⁵⁾。ある器官 (ほとんどの場合は胃) が過剰な刺激を受けて興奮、それが器官の炎症に転じて病的な症状をもたらす、神経の交感を通じて他の器官に伝わり、そこでも興奮、炎症、不調の段階が繰り返されるとするブルセの主張は、結核や梅毒といった身体を蝕む病に留まらず、神経症などの精神疾患の原因解釈にも適用され、十九世紀半ばの医学、心理学、哲学にまで影響を及ぼした⁽⁶⁾。一つの器官の病変が他器官を侵食し、最終的には全体の調和を損なう (病巢 *la lésion*) という観念は、オーギュスト・コントやクロード・ベルナルへ、そして『実験医学序説』に感銘を受けたゾラへと引き継がれたのである。

ブルセは発熱を、過剰な刺激を受けた器官の興奮が転じた炎症のいち症状と定義した。ファン・ブーレンは、コント、ベルナルを通じてブルセの影響下にあったゾラの作品においても、刺激過剰の状態を示すメタファーとして「発熱 *la fièvre*」の語が用いられていると説く⁽⁷⁾。それによれば、「発熱」に喩えられる『獲物の分け前 *La Curée*, 1871』のルネの浪費やサッカーの狂気じみた土地投機事業は過度な興奮、炎症であり、すなわち周囲の人間をも刺激し興奮させる「病巢」である⁽⁸⁾。

ゾラは『ルーゴン＝マッカール叢書』開始以前、1866年に執筆した「小説の二つの定義“Deux Définitions du roman”⁽⁹⁾」において、la fièvreの形容詞形であるfiévreux(se)を、第二帝政以降のパリを表現する語として用いている⁽¹⁰⁾。また、『獲物の分け前』では、大改造に伴う土地投機バブルに湧き立ち、新興成金が娼婦たちとの遊興にふける墮落したパリの風俗を表す比喩として「パリの熱っぽいまどろみ(le sommeil fiévreux de Paris)」が用いられている。「発熱した都市」というパリ解釈は、『愛の一ページ』で用いられた疫病と汚穢の巣窟パリのイメージ⁽¹¹⁾と響き合う。エレーヌ母子が各部末で様々な感情と想念と共に見下ろすパリは、過剰な刺激を受け興奮した器官であり、炎症を起こし発熱した器官であり、その存在によって周囲の器官を刺激する病巣なのである。

大地母神の系譜に連なる女神ジュノン(ヘラ)に喩えられる⁽¹²⁾ほど健康的な魅力に溢れた貞淑な女性エレーヌをとらえた「突然の情熱」、それも妻子ある男性との不倫恋愛は、彼女がパリ＝病巣に接し刺激を受けた結果として起こった炎症であると読みかえることができる。エレーヌに強く執着する病弱な娘ジャンヌは、自分の手を振り払って一人で出掛けていった母親はパリにいるのだと空想する⁽¹³⁾。ジャンヌにとって、最愛の母親を奪い取ったのは、具体的な嫉妬の対象であった愛人のドゥベルル医師ではなく、最終的にはパリという都市なのだ。独特の鋭敏な感覚を備えた彼女⁽¹⁴⁾は、献身的な母だったエレーヌの変化、病弱な娘に構わず不貞に溺れる道徳観の腐敗が、パリ＝病巣から受けた刺激に起因するもの(病変)だと見抜いているのである。

病の媒介者 - ジュリエット・ドゥベルル

母親から拒絶されたショックで心身を衰弱させたジャンヌは、エレーヌの心が自分から離れたことを、「子供が行かないたぐいの場所 *cet endroit où les enfants ne vont pas*」であるパリへ去ったという形で解釈している。しかし、実際にはエレーヌはパリには行っておらず、母子の住居のごく近隣に位置するオー小路のアパートマンで、ドゥベルル医師との逢瀬に耽っていたのであった。

エレーヌとパリとの地理的な距離は、エレーヌが病弱な娘を献身的に介護する理想的な母であった頃から変化せず⁽¹⁵⁾、物語は終始、パッシーを舞台として進行する。自身がパリへと足を踏み入れることのないエレーヌと病巣＝パリとを繋いでいるのは、物理的接触ではなく、パリとパッシーを行き来し、大都市の内部の汚穢や浮薄な文化に日常的に触れている近隣住民である。

エレーヌにパリの病を伝達する媒介者の筆頭として挙げられるのが、「パリ風の奇妙な教育のせいで、少々活発すぎる振る舞い (*les allures un peu vives, qu'elle devait à sa singulière éducation parisienne*)」をするとされるジュリエット・ドゥベルルだ。

ドゥベルル医師の妻であるジュリエットは、貞淑で実直な女性として描かれるエレーヌとはほとんど対極をなす、不実で享乐的な生まれながらの上流夫人である。彼女は黒髪とミルクのよう

な白い肌をした、小柄だがふくよかな美人⁽¹⁶⁾で、初登場の場面で、前日にヴォードヴィル座で鑑賞した芝居の感想を興奮気味に語っている様子からも明らかに、パリに足繁く通って富裕層らしい遊興に耽っている。彼女は明朗快活で親切な好人物であり、エレヌには「天使のように優しい *d'une bonté d'ange*」人だと言われている一方、病的なほどの活発さ⁽¹⁷⁾で動き回る落ち着きの欠けた女性として描かれている。

ドゥベルル夫人は、夢想到に耽ると悲しくなってしまうので、何時間もの間お喋りを続けていた、エレヌの無言の同意があれば満足で、エレヌがほんの少し頷いたり首を降ったりすると勢いを増してお喋りを再開するのだった。彼女が話題にするのは仲良しのご婦人方についての際限のない噂話であったり、次の冬に開くパーティの計画だったり、日々の出来事についての口の軽いお喋り女なりの見解であったりした、つまりこの美しい女性の狭い額のなかでぶつかり合っている社交界のあらゆる混沌^{なまご}だった、この混沌が、子供たちへの愛情の吐露や、友人たちの魅力を褒め称える興奮気味の文句と、乱暴に入り混じっているのだった⁽¹⁸⁾。

大変なお喋りであるだけでなく、社交的で企画好きな彼女は、病弱な娘と家に引きこもって暮らすエレヌへの友情や、教会での慈善活動や、友人たちと共同で上演する芝居の練習、あるいは死んだジャンヌを送る葬列の準備など、次から次へと「生きる糧となる情熱 *ces passions, dont elle vivait*」の対象を見つけてくるのだが、それらの行動は彼女の善意や慈愛の結果ではなく、「趣味のいい感動 *une émotion de bon goût*」を与えてくれる上品な気晴らしとして選ばれたお遊びにすぎない。ジュリエットは若き投資家でパリの情報通として婦人たちにもてはやされるマリニオン青年と浮薄な友人関係にあり⁽¹⁹⁾、ドゥベルル医師が不在のトゥールヴィル旅行の間に、ついに愛人関係を結んでしまう。際限のないお喋りや絶え間なく新たな暇つぶしを求める度を越した活動性は、彼女が刺激過剰の興奮状態にあることを示しており、偽善的な精神や不貞は興奮によって引き起こされた炎症、病症である⁽²⁰⁾。

エレヌは娘の命を救ったドゥベルル医師に好意を抱くが、以下の通り、ジュリエットとは正反対の謹厳な人生を歩んできた彼女は、愛情を具体的な行動として表現することができない。

エレヌは内面の細部に、まさにその朝、ロザリーと共に締めた一月の勘定に思いを馳せた、そして、その整然として秩序立っていることを誇らしく思った。三十年以上もの間、彼女は品位と絶対的な堅実さのなかで生きてきた。正しさだけが彼女の心を躍らせるものだった。自らの過去を探ってみても、いつときの気の迷い一つ見出すことができず、平坦で真っ直ぐな道にそって穏やかに歩んでいることを自覚するのだった⁽²¹⁾。

肉体的な快楽を求めるという発想すら持たず、「身を任せることなく、敬虔にアンリを愛していくのだと自分に課した誓い *le serment qu'elle s'était imposé d'aimer Henri saintement, sans jamais lui*

appartenir」を立てたエレヌはしかし、無意識のうちに軽薄なジュリエットから大小の影響を受けている。第一部第五章でエレヌはウォルター・スコットの『アイヴァンホー *Ivanhoe*』を読みながら、主人公に熱烈な恋をする貴婦人口ヴェーナに自身を重ねて愛に夢を馳せる。彼女には読書の習慣がなく、普段であれば小説などでたらめで子供じみている⁽²²⁾として歯牙にもかけないことが明言されている。一方ジュリエットは、同じ第一部の二章において、エレヌの前でマリニオン氏に「あの小説はお読みになりました？ Est-ce que vous avez lu le roman?」と尋ねており、小説を好んで読んでいることがわかる。ドゥベルル医師がジャンヌを治療したことをきっかけに出会った二人の女性の距離は、第一部の二章～四章を通じて急速に縮まっていくので、第五章のエレヌの気まぐれは、ジュリエットの読書趣味に刺激されてのものだという推測も可能だ。

また、第三部一章でエレヌは、ジュリエットが聖母月の祭礼のために自宅の庭のバラの花を摘んでいるのを見かけたことを最初の契機として、ジャンヌと共に、宗教活動に凝っているジュリエットと連れ立って教会へと足を運ぶのをその月の夜ごとの習慣とした。ジュリエットについては「寄宿学校で培った宗教の下地がこの軽はずみな若い女性の頭の中で再熟し、ちょっとした信心の業として表現されており、子供時代の遊戯を思い出してもしたかのように、彼女の方でもそれを楽しんでいるのだった⁽²³⁾」という記述があり、彼女が宗教的感動を新しい快樂と受け止めている様子が説明されている。対するエレヌは、「宗教的な教育とは無縁に育てられた *grandie en dehors de tout éducation dévote*」とあるが、聖母月の勤行に魅力を感じるようになり、マリアへの崇拝を通じて、「愛すること *d'aimer*」の欲びに目覚める。

エレヌは感動のありかである教会に日参した、そこでは、涙に濡れた目をして、何も考えずに、えも言われぬ熱愛の中に我を忘れていたことが許されるのだった。夜ごとに一時間、彼女は慎みを忘れて、日中ずっと堪えていた恋をその心のうちで開花させ、その胸中にあるものを、祈りの文句の中、衆目の前、群衆による信心ぶかいざわめきのさなかへと、ついに解き放つことができるのだった。⁽²⁴⁾

エレヌは、神への敬愛の影でドゥベルル医師への恋愛感情を解き放つことができる場所として教会を求め、そこでは神を愛する体で現実の男性を愛することを自らに許す。『アイヴァンホー』を読んでいた当初は、愛に我を忘れることなどないと考えていたエレヌは、ジュリエットに影響されて始めたミサへの参加を通じて愛する行為の甘美に目覚めたのだが、妻子ある男性への恋心を認め、限られた場であるとはいえそれを解放していたことが、のちの具体的な不貞関係へと繋がっていることは言うまでもない。

さらに、ジュリエットの行動は、エレヌがドゥベルル医師に身を任せるきっかけにもなっている。第四章以後、トゥールヴィルの旅行から戻ったジュリエットは、「好奇心と、他のみんなと同じでいたいという欲求 *La curiosité et le besoin d'être comme les autres*」から、マリニオン氏の求めを受け入れ彼と恋人同士になっていた。ドゥベルル家での晩餐会に出席し、逢引きについての二

人の問答を偶然耳にしたエレヌは、「あれほど幸せで、真っ白で落ち着いた頬をした、あんなに穏やかな顔つきの女性 *cette femme si heureuse, d'un visage si calme, aux joues blanches et reposées*」が、夫を裏切るという「突飛でおぞましいこと *quelque chose d'inattendu et de monstrueux*」をしている事実には愕然とする。しかしエレヌは、すぐに自分の嫌悪感がお門違いなものであることに気づく。晩餐会の招待客の中には、自分と同棲していたこともあるかつての恋人と実の娘を結婚させようとしている夫人がおり、自分の愛人と夫が世間話をしている状況に顔色ひとつ変えない妻がおり、それらの不貞を平然とお喋りの話題にする人々がいる。彼らはみな「パッシーで暮らす上流ブルジョワジー *toute la haute bourgeoisie de Passy*」であり、エレヌのすぐそばで暮らす隣人たちである。

このもったいぶった連中、こんなに立派な見てくれのブルジョワジーの中にはそれじゃあ、罪のある女性しかいないのだろうか？ わたしの田舎くさい厳格主義は、パリ生活の容認されたごた混ぜに驚かされるばかりだ。そして彼女は、ジュリエットが自分の手を握ってくれた時にあれほど苦しんだ自分を、辛辣にあざけた。まったく！ あんな麗しい良心の呵責を感じていたなんて、本当に馬鹿馬鹿しいことだわ！ここでは不貞が、屈託のないやり方、おしゃれで洗練されたものとして磨き上げられて、ブルジョワ的だと受け入れられているのだから⁽²⁵⁾。

エレヌは、ジュリエットをはじめとする上流ブルジョワジー、彼女もその一員として受け入れられている社会グループにおいては、不貞はありふれた遊戯に過ぎず、突飛なことでもおぞましいことでもないのだと実感する。換言すれば、彼女が誇る「いつときの気の迷い一つ見出すことができず、平坦で真っ直ぐな道にそって穏やかに歩んで」きた過去も、ずっと重んじてきた正しきや品位や堅実さも、彼女が思っていたほど価値のあるものではなく、誤り、正道を外れたからといって罪を負うことはない。ジュリエットの夫と恋をしていることを、彼女への裏切りで罪だと自責していたエレヌは、他ならぬジュリエットの不貞行為を知ったことで、自身の厳格な倫理観から解放される契機を得た。そして、ジュリエットの夫への裏切りに嫉妬と怒りを覚えたエレヌは、ジュリエットの不貞を告発する匿名の手紙を書いてドゥベルル家に投函する。密告の罪悪感に耐え切れず、密会の場に赴いてジュリエットの逃亡を手助けしたことで、手紙を読んで駆けつけたドゥベルル医師と二人きりで鉢合わせしてしまい、誘惑に抗いきれずそこで彼と関係を結んでしまうのだ。

たった一つのあやまちさえ犯したことの無いエレヌが「パリ生活の容認されたごた混ぜ」、パリの病とも言うべき不貞行為に身を委ねてしまうまでの過程には、ジュリエットの存在があり、エレヌの倫理観の破綻は、彼女自身が（パリからの刺激で）興奮した器官として読み換えられるジュリエットが与える刺激に反応する形で起こっている。

『獲物の分け前』との類似

ところで、「年下の洒脱な青年との不適切な友情から不倫恋愛に陥る上流夫人」というジュリエットとマリニオン氏の関係は、『獲物の分け前』のルネとマクシムのそれによく似ている。ジュリエットの「三十歳前後、裕福なブルジョワジーの家に生まれ、母親を早くに亡くし、歳の離れた未婚の妹がいる。寄宿学校で厳格な宗教教育を受けて育ち⁽²⁶⁾、金満家の夫と結婚し、自宅でサロンを開いて資産家や気の置けない友人たちと交流し、何不自由のない生活をしている美しい上流夫人」という人物設定も、ルネと酷似している⁽²⁷⁾。

『愛の一ページ』には、ジュリエットを取り巻くエピソードを中心に、『獲物の分け前』と重複するモチーフが数多く登場する。不倫相手の男性を伴ってのツールヴィル旅行は、ルネも『獲物の分け前』の五章で行っているし、ジュリエットが友人たちと演劇の練習にはげむのは、ルネが仲良しの婦人たちと共に活人画を披露する挿話を思い起させる⁽²⁸⁾。『愛の一ページ』第二部で行われる、ジュリエットが主催する子供たちの仮装舞踏会とそこで行われるどことなく淫らなカドリーユ⁽²⁹⁾は、ルネが活人画を披露した後に開催された仮装舞踏会や男女交歓を思わせるカドリーユの乱痴気騒ぎを想起させる。

注目すべきなのは、ジュリエットとの逢瀬のためにマリニオン氏が用意し、結果的にエレヌとドゥベルル医師との情事の場として使われたオー小路のアパルトマンの構造である。階段と廊下に接した部屋と一つ奥の部屋は、マリニオン氏が金をかけて改装したために豪華で清潔だが、さらに奥に続く三部屋は手を入れられておらず、不潔で薄暗いまま放置されている⁽³⁰⁾。普段は使用されることのないこの三部屋のさらに奥にもう一つ扉があり、これが古い使用人用の階段に繋がっているのである⁽³¹⁾。オー小路に面した入口やそこから続く階段とは別の出入り口が存在するというわけで、家庭のある夫人が自宅の近隣で不倫の逢瀬を楽しむにはうってつけの物件なのだ。

このアパルトマンの構造は、ルネの義妹で胡乱なブローカー業を営むシドニー夫人が所有するレース商店の構造とよく似ている。パピヨン通りとフォーブル＝ポワソニエール通りの両方に面したこの店には入口が二つあり、中二階へ行くには壁に埋め込まれた階段を登る必要がある。シドニー夫人は中二階で売春斡旋の副業を営んでおり、買春に訪れた男性客（彼らはシドニー夫人が売春斡旋業を隠蔽するために中二階に置いたピアノを見にきた客という体になっている）はパピヨン通りの入口から、一階で売られているレース目当ての客、あるいはそれを自称する売春目的の女性は、フォーブル＝ポワソニエール通り側から出入りする⁽³²⁾。男性客は自分が売春宿に通っていることを知られずに済み、女性も身体を売っている事実を秘匿することができるのだ。シドニー夫人はこの特殊な構造の家屋を、上流夫人たちに不倫相手との密会の場を提供することもあり、ルネも以前、ここで行きずりの若い男性と関係を持ったことがある。

『愛の一ページ』第四部一章に、婦人がたの間でジュリエットの新しいドレスが話題になるシー

ンがあるが、そのドレスは仕立て屋のウォルムスの手になるものであることが言及されている⁽³³⁾。ウォルムスは『獲物の分け前』にも登場したキャラクターで、結婚当初からのルネ御用達の仕立て屋であり、その衣装道楽のせいでルネは死後、二十五万七千フランものウォルムスへの未払金を残している。ルーゴン＝マッカールの血族ですらないウォルムスの再登場からも明らかのように、ルネとジュリエット、『獲物の分け前』と『愛の一ページ』で繰り返されるエピソードやモチーフの重複は、無意識や偶然によるものではなく、明確な意図に基づいている。ジュリエットが買い物や舞踏会のために足繁く通うパリは、ルネが社交界の華と咲き誇るパリであり、ゾラ自身が「帝国という堆肥の上に生えた病的な植物（la plante malsaine poussée sur le fumier impérial⁽³⁴⁾）」と表現する、義母子の近親相姦という背徳を肥育した温室としてのパリなのである。

結語 パッシーという土地

『愛の一ページ』の舞台であるパッシーは、1860年にパリ市への編入が決定された地区の一つであり、現在ではパリ市十六区に含まれている。小説の舞台設定は1853年から1856年のため、エレヌたちが暮らしているパッシーはまだパリの一部になる以前、1780年代に市税を適切に徴収する目的で作られた「徴税請負人の壁」と、1840年代にアドルフ・ティエール首相によって軍事目的で建設された「ティエールの壁」との間に位置し、「小郊外」と呼ばれた地域の一部をなすパッシー村である。十七世紀以降、バルザックをはじめとする著名人や名だたる資産家が邸宅を構え⁽³⁵⁾、ルソー、ロッシェニ、ドラクロワなどの文筆家や芸術家をサロンに招いていたパッシーは、現在に至るまで伝統的な高級住宅街として知られている。

松井道昭は著作『フランス第二帝政下のパリ都市改造』⁽³⁶⁾において、パリ市編入以前のパッシーを「半農村・半住居地域」で人口も少ないと説明する一方で、パッシーが含まれる「小郊外」地域全体が「(ティエールの)城壁の内側にありながら、行政的にはパリとは別個の行政区を維持していた。しかし、経済的にはパリの生活に結びついていた。(中略)中核との結びつきは強かったものの、隣り合う市町村相互の関係は密ではなかった⁽³⁷⁾」という独特の様相を示していたことを指摘している。

パリと生活の足並みを揃えていながら行政区分としては未だパリではないパッシーに暮らすエレヌが見下ろしているパリは、ルネとマクシムが会おうパリ、オスマンの大改造によって姿を変えられ、いずれ二人の近親相姦の舞台になるパリである。不貞と虚実を容認するパリの病は、ジュリエットをはじめとするパッシーの住民たちの生活をも冒しつつある。しかし、『愛の一ページ』が描いているのは、『獲物の分け前』が炙り出したような、ひとつの社会の腐敗した倫理と風俗の乱れそのものではなく、あくまで地方出身の一人の女性の心身に起こった変化であり、ごく私的な生活と経験である。エレヌが不貞に手を染めるまでには、自身がすでに病巣パリからの

刺激で発熱した器官であるジュリエットという媒介者による数段階の感化が必要であり、『獲物の分け前』に描かれた罪と背徳、パリとそこでの生活それ自体は、エレヌとは一定の距離を保っている。

『愛の一ページ』の最大の特徴は、各部の最終章に、パッシーから見たパリのジオラマ的展望の情景描写がふんだんに語られることだ。この描写は冗長であるとして、また 1850 年代当時には存在しないはずの建築物が描き込まれている⁽³⁸⁾ ことについて、小説の発表当時から批判の対象とされてきた。ゾラはこれらの批判に対し、1884 年版の序文では「私は（各部末の）五つの描写を擁護はしません。私はただ、みなが我々を描写狂と呼んでいたとしても、我々が描写したいという欲求ただそれだけに屈することはほとんどないのだということに、気づいていただきたいと願うばかりです。調和的にしたい、人間的にしたいという望みのために、我々の描写は複雑になっていくのです。我々の創作は全て我々に属しており、我々はそれを作品に入れ込もうと務めます、果てしない方舟を夢見て⁽³⁹⁾」と弁明を試みている。直接的な接触ではなく、媒介者を通じた間接的な交感によってパリの病（墮落した風俗と品行）に罹患するエレヌとパリを、病巣とその他の器官として捉えた際の位置関係は、「遠景として視界に入る場所ではあるが、行政的には同一ではない」という、五つの描写によって強調されるパリとパッシーを隔てる距離と呼応している。パリであってパリでないパッシー、汚穢と犯罪に満ちた悪所としても、雄大な景観を示す憧れの街としてもパリを眺めることができるパッシーを舞台にした小説ならではの、不貞や不義や虚実との絶妙な距離感が、酷薄あるいは醜悪な現実を前面から描いたスキャンダラスな二作品の間を埋める『愛の一ページ』の持ち味といえよう。

注

- (1) « C'est un peu popote, un peu jeanjean; mais cela se boira agréablement, je crois. »

Émile Zola, *Correspondance / Émile Zola*, éditée sous la direction de B.H. Bakker ; editrice associé, Colette Becker, conseiller littéraire, Henri Mitterand. Tome III juin 1877 – mai 1880, Presses de l'université de Montréal, 1982, p.85, à Joris-Karl Huysmans, 3 août 1877

- (2) « Une page d'amour, écrite entre *L'Assommoir* et *Nana*, a dû être, dans ma pensée, une opposition, une halte de tendresse et douceur. J'avais, depuis longtemps, le désir d'étudier, dans une nature de femme honnête, un coup de passion, un amour qui naît et qui passe, imprévu, sans laisser de trace. »

Émile Zola, *Correspondance / Émile Zola*, éditée sous la direction de B.H. Bakker ; editrice associé, Colette Becker ; conseiller littéraire, Henri Mitterand, Tome VII juin 1890 – septembre 1893, Presses de L'université de Montréal, 1989, p.288-289, à Jacques Van Santen Kolf

- (3) « Ainsi les organes musculaires et nerveux entretiennent l'activité des organes qui préparent le sang; mais le sang à son tour nourrit les organes qui le produisent. Il y a là une solidarité organique ou sociale qui entretient

une sorte de mouvement perpétuel jusqu'à ce que le dérangement ou la cessation d'action d'un élément vital nécessaire ait rompu l'équilibre ou amené un trouble ou un arrêt dans le jeu de la machine animale. Le problème du médecin expérimentateur consiste donc à trouver le déterminisme simple d'un dérangement organique, c'est-à-dire à saisir phénomène initial qui amené tous les autres à sa suite par un déterminisme complexe, mais aussi nécessaire dans sa condition que l'a été le déterminisme initial. (...) Nous verrons, par des exemples rapportés plus loin, comment une dislocation de l'organisme ou un dérangement des plus complexes en apparence peut être ramené à un déterminisme simple initial qui provoque ensuite des déterminisme plus complexes. »

Claude Bernard, *Introduction à l'étude de la médecine expérimentale*, Flammarion, 1984, pp.136-137.

- (4) « il existe une solidarité qui lie les différents membres, les différents organes entre eux, de telle sorte que, si un organe se pourrit, beaucoup d'autres sont atteints, et qu'une maladie très complexe se déclare. »

Émile Zola, *Émile Zola ; notes et commentaries de Maurice Le Blond; texte de l'édition Eugène Fasquelle, Les Œuvre Complètes Tome 41*, « Le Roman Expérimental », 1928, p.30

- (5) E.H. アツカークネヒト著、『パリ、病院医学の誕生』 館野之男訳、みすず書房、2012年、p.114

- (6) Maarten Van Buuren, « *Les Rougon-Macquart* » d'Émile Zola : *de la Métaphore au Mythe*, Librairie José Corti, 1986, p.189.

- (7) Van Buuren, *Ibid.*, p.195-196.

- (8) Van Buuren, *Ibid.*, p.196-197.

- (9) Émile Zola, *Œuvres complètes / Émile Zola* ; publiées sous la direction de Henri Mitterand ; édition préparée sous la direction de Françoise Juhel Tome X, *Œuvre critique I*, « Deux définitions du roman », Cercle du Livre Précieux, 1968, OC T.10 と表記 (pp.273-283.)

- (10) « Paris, la cité moderne, fiévreuse et savante »

OC. T.10, p.279.

- (11) Émile Zola, *Une page d'amour*, dans *Les Rougon-Macquart* édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes, index établis par Henri Mitterand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome II, 1961, p.1029.

同 p. 854 にある「パリはしばしば、熱く悩ましい息吹を送り込んで、二人を不安にさせていた (Souvent, Paris les inquiétait, lorsqu'il leur envoyait des haleines chaudes et troublantes.)」という表現も、パリが発熱している (そのために吐く息が熱い) ことを前提としている。

- (12) *Ibid.*, p.809.

- (13) *Ibid.*, p.1029.

- (14) 高橋愛は、「ゾラ『愛の一ページにおける感覚の諸相』 (社会志林、63 (2)、法政大学社会学部学会、2016、pp.79-10) において、ジャンヌが視覚や聴覚ではなく、嗅覚に頼って外界を認識していることを指摘、母親から漂う香りが変化したことを以て母親との関係が破綻したと判断する動物性に、彼女の心身の脆さが現れていると分析している。

- (15) パッシーに移住して来てから物語冒頭のドゥベルル医師との邂逅があるまでの一年半で、エレヌとジャンヌがパリへと足を運んだ回数は3回に満たない。 *ibid.*, p.822

- (16) *Ibid.*, p.813.

- (17) « La vivacité nerveuse de Juliette, qu'elle noyait d'une langueur étudiée, ne leur permettait pas de causer longtemps ensemble; »

Ibid., p.882.

ジュリエットの神経性の活発さは、彼女はそれをわざとらしい憂愁で誤魔化していたけれども、長く二人きりで親密なおしゃべりをするままにさせてはおかなかつた。

- (18) « Mme Deberle, que la rêverie désespérait, causait pendant des heures, se contentant des approbations muettes d'Hérène, repartant de plus belle au moindre hochement de tête. C'étaient des histoires interminables sur les dames de son intimité, des projet de réception pour le prochain hiver, des réflexions de pie bavarde au sujet des événement du jour, tout le chaos mondain qui se heurtait dans ce front étroit de jolie femme, et cela mêlé à de brusques effusions d'amour pour les enfants, à des phrases émués qui célébraient les charmes de l'amitié. »

Ibid., p.880.

- (19) *Ibid.*, p.839.

- (20) ジュリエットは「パリでの買い物からお喋りの熱を持ち帰る (rapportant la fièvre bavarde de ses courses dans Paris, *Ibid.*, p.883)」ことがあると指摘されている。また、小説終盤の第五部で、「オリエント問題がパリを沸かせている (La question d'Orient passionnait Paris)」時勢に倣い、目下この議論に夢中のジュリエットが、新聞に書かれた内容を尋ねるシーンでも「ジュリエットは熱っぽく尋ねた (demanda fiévreusement Juliette)」という表現が使われている。ジュリエットは熱 (la fièvre) を持った存在であり、彼女の発熱はパリに由来するものなのだ。

- (21) « elle songeait à details d'intérieur, aux comptes du mois qu'elle avait arrêtés le matin même avec Rosalie, et elle sentait très fière de son bon ordre. Elle avait vécu plus de trente années dans une dignité et dans une fermeté absolues. La justice seule la passionnait. Quand elle interrogeait son passé, elle ne trouvait pas une faiblesse d'une heure, elle se voyait d'un pas égal suivre une route unie et toute droite. » *Ibid.*, p.850.

- (22) *Ibid.*, p.846.

- (23) « Le fond de religion qu'elle tenait du pensionnat remontait à sa tête de jeune femme écervelée, et se traduisait part de petites pratiques qui l'amusaient, comme si elle fût souvenue des jeux de son enfance. »

Ibid., p.921.

- (24) « Elle revenait là, comme à un lieu d'attendrissement, où il lui était permis d'avoir les yeux humides, de rester sans une pensée, anéantie dans une adoration muette. Chaque soir, pendant une heure, elle ne se défendait plus; l'épanouissement d'amour qu'elle portait en elle, qu'elle contenait toute la journée, pouvait enfin monter sa poitrine, s'élargir en des prières, devant tous, au milieu du frisson religieux de la foule. »

Ibid., p.922.

- (25) « Dans ce monde digne, parmi cette bourgeoisie d'apparence si honnête, il n'y a avait donc que des femmes coupables? Son rigorisme provincial s'étonnait des promiscuités tolérées de la vie parisienne. Et, amèrement, elle se raillait d'avoir tant souffert, lorsque Juliette mettait sa main dans la sienne. Vraiment! elle était bien sotté de garder de si beaux scrupules! L'adultère s'embourgeoisait là d'une béate façon, aiguisée d'une pointe de raffinement coquet. »

Ibid., p.981.

- (26) ゼラは、少女時代に家庭から切り離された修道院で過度に禁欲的な生活を送り、純潔を尊ぶ教育を施されることが、上流夫人たちの道徳観を荒廃させると批判している。

Émile Zola, *Oeuvres Complètes / Émile Zola*, publiées sous la direction de Henri Mitterand, édition préparée sous la direction de Tome XIV, *Chroniques et Polémiques II*, "Femme du monde", Cercle du livre précieux,

1970, p.682-683.

(27) ジュリエットの実父のルテリエ氏はパリのキャピュシーヌ通りに大きな絹織物の店を持つ資産家で、妹のポーリーヌは十六歳。夫のアンリは医師で、同じく優秀な医師だった父から患者名簿と百五十万フランの財産を相続した地元の名士である。ルネは革命期以前からの上流ブルジョワジーの家系に連なり、父親は裁判長を務めた厳格な人物。妹のクリスティーヌは二十歳で、彼女を産む時に母親が亡くなったため、年長のルネは修道院の寄宿学校に預けられた。夫のアリステイド・サッカールは新進気鋭の投資家であり、美しいルネは社交界の華として、数々の男性と浮き名を流しながら煌びやかな生活を送っている。

(28) Émile Zola, *La Curée*, dans *Les Rougon-Macquarts*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes, index établis, par Henri Mitterand, Gallimard, 1960, « Bibliothèque de la Pléiade », Tome I, (以下、LC と表記), p. 537.

第四部で、ジュリエットは仲良しの婦人たちと共同でミュッセの『きまぐれ』を上演する準備をしている。

(29) « Après le quadrille, Hélène appela Jeanne pour rattacher sa robe.

« C'est lui, maman, disait la petite. Il me frotte, il est insupportable. » »

Ibid., p. 899.

カドリーユの後、エレヌはジャンヌを呼んで、着物を整えてやった。

「あの子よ、ママ」少女は言った。「身体を擦り付けてきたの、がまんできないわ」

(30) *Ibid.*, p.997.

(31) *Ibid.*, p.1018-1019.

(32) LC, pp. 368-369.

(33) « Oh! délicieuse, vraiment délicieuse! Elle sortait de chez Worms. »

ああ！うっとりしちゃう、本当にうっとりしちゃう！彼女はウォルムスの店から出て来たわ。

Ibid., p.977

(34) Émile Zola, *Correspondence / Émile Zola*, éditée sous la direction de B. H. Bakker, éditrice associé Colette Becker, conseiller littéraire, Henri Mitterand, Tome II 1868- mai 1877, Presses de L'université de Montréal, 1980, p. 304, À Louis Ulbach, 6 novembre 1871.

(35) Eric Hazan, *L'invention de Paris : Il n'y a pas de pas perdus*, Édition de Seuil, 2002, p.239.

(36) 松井道昭著、『フランス第二帝政下のパリ都市改造』、日本経済評論社、1997年。

(37) 同書、p.208より引用。

(38) 中村翠、『Stella』、n°35、九州大学フランス語フランス文学研究会、pp.59-69

(39) « Je ne défends donc pas mes cinq descriptions : je tiens uniquement à faire remarquer que, dans ce qu'on nomme notre fureur de description, toujours en nous d'intentions symboliques et humaines. La création entière nous appartient, nous tâchons de la faire entrer en nos œuvres, nous rêvons l'arche immense. »

Ibid., p. 1608.